

「一心堂書店」鎌刈さんに頂いた風車関連情報について

メモ) 鉄本 2022.09.22

2022. (令和4年) 9.1 (木曜日) (4)



湊・石津を中心に林立する風車
(昭和33年、撮影 中田鐵氏)

軟弱野菜に給水栽培する都市近郊農業が盛んであった。桶(底抜けタンゴ)の底の穴を棒で持ち上げ、そこから円状に効率よく散水出来る。二つの桶で40キロ程もあり相当な重労働だ。昔の人の体力には感心する。堺の湊・石津を中心とする灌漑風車は昭和20、30年代には200基以上もあったとされ、全国でも発達した地域である。池には植物が繁茂し、ゲンゴロウ・ミズスマシ・カエルが遊び、ヤシマが飛び交う生き物の小宇宙であった。現状撮影の時は、ヤシマが飛んで来たのには驚いた。「カラシコ

風車は、風力による羽根の回転運動をクランクで上下運動に変え、手動ポンプに繋ぎ地下水を汲上げる装置である。堺海岸地帯は砂地で保水が悪く、数メートル掘れば湧いてくる地下水を風車で汲上げ、ためた泉水池よりミツバ・ネギ・キクナなどの

「風車のある光景」

一心堂書店(湊駅前) 鎌刈一身

堺の今むかし巡り (2)

「昔の風景」写真を募集いたします。商店街、建物、



現在の堺区出島町5丁
(塩穴通・高架は南海本線)

ロン」と音を立てて回転する懐かしいのどかな夏の風物詩であった。しかし海が埋め立てられ、住宅の過密化、汲上げポンプの普及により消えていく。現役風車は存在しないが、新湊小学校と大泉緑地にその姿を見ることが出来る。自然の力のみを活用した堺の誇るべき近代農業遺産であり、今で言う最先端のエコロジーであった。

【畑への給水手順】

- ① 風車によって汲み上げられた水は、泉水池に貯水されます。そこから畑への給水は人力です。
- ② 約20Lサイズの桶(タンゴ)に水を移し、2つの桶を天秤棒で担いで畑に散水します。(記事の写真参照)
桶の構造: 桶の底には口径2cm余りの丸い穴が開けられており、その穴を開閉する取手付きのフタが取り付けられています。(写真参照)
- ③ 穴の口径が大きいので、水はあっという間に無くなってしまいます。40kgの桶を担いで泉水池と畑を往復することになります。
かなりの重労働と想像できます。



【風車の風景】 写真は鎌刈氏提供 及び「堺市の130年」(2019)から

①石津の最後の風車(S50年頃)



②楠町の最後の現役風車



③阪堺電車と風車(S40年代)



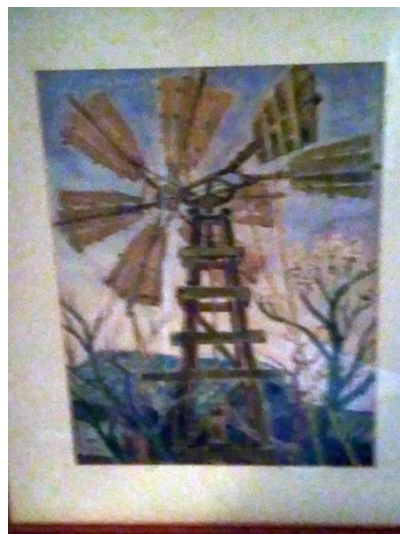
④林立する風車(石津 S30年代)



⑤泉水池からの汲み上げ(S30年代)



鎌刈さん宅では、写真の他、風車の絵画や模型なども集めておられました。



鎌刈さんが語る夢： 浜寺公園に、世界の新旧の風車を集めて動的展示物スペースとし、再生可能エネルギー(SDGs7&13)推進のシンボル空間としたい。